

▲中に就き洛北鷹ヶ峰の勝景、言語に絶す。二峰三峰畧ぼ其の高さを等しうし、僅かの間隔を置いて前後重疊す。恰も努級大艦が雁翼の陣を張つて北方に航行するが如き處、此れ實に鷹が峰の絶勝也。今朝全幅に雪を置いて、風致正に神仙の域也。

▲山有る處必らず雪有り。雪有りと雖も寸餘に達するは少なし。此處に山景特殊の雅趣を帯びたり。其の雪を被る連山を凝視する事須由にして、寫生の法に會得する處少なからず。余や何等の畫工に非ざるも、亦以て畫を見るの法を自得し得たるを悦ぶ。

▲凡そ雪景を描くに、山は純白と爲すの常也。純白の山は恐らくは甚だしき高山か然らずんば北國積雪丈餘の連山なる可き也。雪深しと雖も全山の樹木を埋没するに足らず。山低く樹木多き場合に純白の全山を描くは、恐らくは自然現象の突發的事故か、然らずんば畫者の妄ならん。

▲余熟々鷹が峰を見るに、山面、白く見ゆるは僅に其の中央部のみにして、其れより山頂に及び、又左右山腹に及ぶに随つて其の黒色を増し、山の輪廓は全然黒色の一帯を隔したり。其の理由を考ふるに、樹木と積雪と參差錯雜する、若し其の比例を各部に同等ならしめば、球面を斜めに見るに随つて樹木の横面を望む事其の分量多く、山と空とを隔する一線は全然立木のみを見るに至るを以ての故也。

▲今此の理を四周の諸山に適用して試みるに、一として其の理の支配せざる無し。重疊せる諸山は其の輪廓頗る明瞭に黒帯を爲す。宛然佛國印象派畫家の片暈しの描法を見るが如し。印象派の描法、其れ此れ範を此處に求むるか。

▲叡山は樹木の赭色に白色を加へ却て紫赭色を帯ぶ。伯刺西産の紫水晶を見るが如し。山骨の露出する部分の積雪、暉々として輝く處以て六方晶系の何れの晶面に比較し得可きか。

二

▲遠く比良峰を望むにこれは全然の純白也。然れども一面の白扇を望むとは其の貌を異にす。圓錐面に光線を受け、反射する部分のみ純白にして、他はこれとの對照により寧ろ甚だ黝色也。畫者須らくこの事實を閑却せざる可し。

▲清の小山謂つて曰く、『人言へるあり。雪を繪く者は其の清を繪く能はず。月を繪く者は、其の明を繪く能はず。花を繪く者は、其の馨を繪く能はず。人を繪く者は其の情を繪く能はずと。數者は虚にして、形を以て求む可からざるを以て也』と。然らば即ち雪の清を繪くや、畫者難中の難也。苟んや純白の高山を繪くに於いてをや。

▲形を以て求む可からざる虚を描く事の難き、敢て一幅の畫面にのみ限る可からず文學も亦同様にこの虚を描くに困しむ。李白の秋浦歌に曰く、『千々石楠樹。萬々女貞林。山々白鷺滿。澗々白猿吟。君莫向秋浦。猶聲碎客心』と。この詩客心を碎く秋浦の景を叙せんとするも、秋浦の秋浦たる所以、全く形無きの虚にして凡筆は描

くに堪へず。李白孤り語の音韻を利用して其の虚を寫すに成功したり。

▲小山此の難局を解決して曰ふ、『知らず實者逼肖する時には、則ち虚なる者、自から出づるを』と。然らば即ち純白の比良峰を描かん爲めには、光線を直接に反射せざる黝色の部分を實に随つて黝色に描く可きが如し。

▲余中華古來の畫論を窺ふ。清の小山は甚だ服す可し。陰陽遠近に於て鑄黍を差へざる西洋畫を評するに於ては、『工みなりと雖も亦匠也。故に畫品に入らず』と稱す。畫く所の人物、屋樹、皆な日影あるを異しむ。然らば即ち純白の山容を描くに日影を附するの不可なるに似たり。

▲翻て思ふに、中華人用ふる處の描法に、全然日影無しと見るは非也。例へば彼の『石に三面あり』と言ふもの、其の眞意は、石法に陰影を加味せんと欲するには非ざるか。石は天地の骨にして、故に之を雪根と謂ふ。山石の法は山を描くの始め也。山石に三面を區別す可くんば全山法に數面を區別する凡そ何の不可あらん。

▲二米の筆意甚だ學び難しと爲す。今人は則ち糞草壤に堆く、蕪穢治らざるが故なりといふ。余竊かに思ふ。二米を學ばんと欲せば、先づ徐ろに山勢の陰陽を判す可し。山に陰陽日影を區別するに至らば、夫れ立どころに眞米を致さんか。

三

▲雪景を描くものを見るに、空は概ね全體に普魯西藍色にして一雲の飛來するものなし。甚だ晴天なるを意味するならんか。降雪の後、日出で、積雪に反映せば、一面の白皚々、其美賞嘆に値す。畫者は此の景を眼中に置きたるものならん。

▲しかも余の實地に見る處を以てするに、降雪の後一兩日、直ちに快晴の日を見るは、我が京都の地に於ては稀れの事也。低氣壓の雨雲來りて降雪を見る。低氣壓の中心の完全に通過し去るに二三日を要するとせば、雪降りて直ちに空晴るゝは甚だ不合理的也。積雪の後には必ず空の全面に數團の雲影を認むるもの也。

▲其の甚だ快晴なるが如く感ずるは、此の雲の破れより日光が照らしつける、眞に其の數分の間のみ。空氣は洗はれて塵影無く、地の雪は結晶の如く光りて網膜を刺す。此れ其の數分時に殊更に快晴を意識する所以也。

▲西湖十景に斷橋の殘雪あり。琵琶八景に比良の暮雪あり。然らば雪景は陽を描くよりは寧ろ陰を描くに勝るゝか。

▲白皚々の雪は、實は光線の量餘りに多くして、其の感甚だ暖かく、此れを描くも雪の冷を思はしめず。余嘗つて此の實感を得、暉々たる積雪を描寫するに、白と朱色との交響樂を以てしたり。觀者啞然として此れを雪と信せず。雪は専ら陰冷なるものと信するが故也。

▲中華人早春と晩秋とを唱ふ甚だ多きも、其の中間の嚴冬を唱ふものは割合に少數也。早春と晩秋と、哀愁全地に滿つるも陰極る處却て陽を生ずるか。嚴冬には哀愁の情切々と來らず。即ち此れに詩情を托するものゝ少き所以也。然れども雪樓の設

あるを見るが故に、必ずしも雪を愛せざるには非ざる也。

▲郭熙が『林泉高致』に曰く、『冬山は慘淡として眠るが如し』と。又曰く、『冬山は昏霾翳塞して人寂々たり』と。冬山の陰感を描かんと欲するが如し。蓋し冬日に快晴の日少きを思ふか。

▲李成が『山水訣』簡にして至れるも、其中冬山の記述を缺く。僅かに『冬樹は槎牙妥帖也』と述ぶ。然らば李成の冬山は雪を帯ぶるの樹を抱く近景を描くの佳なりとするか。

▲仁者は山を樂むと言ふ。知らず山は四季の山に就いて其の何れを指さんと欲するや。高山樗牛は嘗て秋山を以て山の範なりと爲し、此れをプラトオンのイデアの世界に比したり。然らば冬山は其の甚だ過ぎて及ばざるものか。

四

▲本邦古昔山水畫に乏し。畫と言はゞ殆ど全く佛畫に限る。其の山水あるは、僅かに佛畫の人物の配合たるに止まるのみ。山水圖中特に冬山の圖を求めんと欲せば、其の圖誠に寥々たり。

▲余見たる冬山の圖中、最も深く印象したるものは、高階隆景の『春日權現靈驗記書卷』中の一巻也。同書卷元と御物にして容易に吾人の窺知を許さず。嘗て京都に大典記念博覽會あるや、特に同書卷出陳の事あり。會終るの日藝術愛好の士に内覽の機會を與へらる。全篇を開舒して仔細に研究するの便宜あり。余亦其の末席に連るの光榮を得て、此の畫卷の賞玩を縦まにしたり。情致今眼に在り。

▲隆景の筆慎重にして重厚也。冬山を描くに、一々の樹の群體を示し、此れに圓頂の雪を戴かしむ。全山一筆の省畧なし。雪をいたゞきたる近山の朝景を彷彿せしむるに成功す。

▲總じて隆景の山水は、其の人物と共に甚だ妍麗也。全部二十卷、よくも此く精緻

を極めたるものなりと驚嘆の外なし。しかも其の妍麗の色彩は甚だ重厚謹嚴なるが故に、此の靈驗記を寫すに毫末の銜氣を含まず。隆景や、董其昌の所謂『妍にして甜ならざる』もの、逸か。

▲足利の頃に至りて、冬山を描くもの其の數敢て乏しからず。雪舟の如きは其の雅號已に冬に縁あるもの也。冬山を描くに巧みなる、敢て故なきにあらざらん。

▲僧雪舟、諱は等揚、又備溪齊と稱す。備の中州赤濱の人なるが故也。天性畫に巧み也。如拙及び周文を師として其の法を得、更に新意を出すと云ふ。『本朝畫史』の記述する處也。

▲然れども余熟々雪舟の畫を見るに、其の山水たるや實に日本のものならず。此れを唐宋の名畫に比するに、余未だ中華の地を踏まざれども、雪舟は日本に歸りて寧ろ中華北部の風景を描寫したるが如く然り。現在の津畫家頻りに佛國の津畫を模すれども、未だ日本的なる新機軸を開き得ざるに比す可きか。雪舟の畫は當時にあり

ては甚だバタ臭き、否支那料理臭き畫品なる可かりし也。

▲雪舟明國に在りて曰く、『我れ遠く明國に遊ぶは其の志畫師を求むるにあらず。明國名所の地、山川草木是れ我が師也。然らば則ち師我にあつて人にあらず。豈に他に求めんや』と。余此の語の論理を解する能はず。山川草木我が師ならば、本邦の山川此れを師とせんに凡そ何の不足かある。雪舟何すれぞ亦明國に遊ぶ必要ありしや。

▲雪舟大明にありては、本朝の富士三保清見三絶景を描きて時人を驚かし、詹仲加をして其の上に加賛せしめたりと傳ふ。然らば則ち明にありては本朝の絶景を描き、本朝に歸りては明の絶景を描き、以て人にエキゾティックの感心を強要したるものなるか。

▲然れども雪舟が居住したるは周防山口の雲谷寺也。古人の蹤跡に據らずして別に一家を立てたるもの、此の雲谷寺居住の後なるが如し。余未だ山口の地を知らず。

周防の山川幸ひに雪舟の畫品に類するや如何。

五

▲我が京都の山川を描く事の甚だ巧みなるものは、圓山應舉也。應舉通稱は主水、丹波桑田郷穴田村の人也。京都の景勝を描くに巧みなる蓋し故ある也。

▲應舉に就ては語る可き事甚だ多し。然れども今其のすべてを他日に割愛す可し。余應舉に冬山の圖あるや否やを知らず。蓋し此れ有らん。余未だ此れを見たる事無しと言ふ也。

▲應舉の傑作に『保津川眞景屏風』有り。未だ知らず、應舉に叡山の寫生ありや。はた又愛宕鞍馬の寫生ありや。余元來此等の諸高山を寫生したる山水を見たる記憶無し。然らば其の寫生は全く明治大正の新畫家の創見に係るか。早速御舟氏描く處の『比叡山』は、余が昨秋贊嘆を措かざりしもの、中に屬す。山に三遠あり。高遠、深

遠、平遠。御舟氏の作は我々に甚だよく其の高遠を思はしめたり。

▲余が書齋の北窓、叡山、鞍馬、愛宕の諸山を一望の中に歛む。中に就き、机に向ひ直ちに正面に遠望する事を得るものは、大原、鞍馬、雲が畑諸郷の連山也。

▲大原は大原御幸の大原也。其の故事遍く人の知る處也。鞍馬亦義經と鬼一法眼とを以て現はる。此れ亦詳しく記すまでも無し。近時我が友『淨瑠璃姫の古蹟と傳説』なる一冊子を著すものあり。一本を余に贈る。就いて見るに牛若丸は平治三年二月洛北紫野に生れ、後鞍馬山別當東光坊の門弟となると云ふ。紫野は余輩今此の筆を取るの紫野也。然らば紫野と鞍馬とは其の關係甚だ淺からず。然れども余の鞍馬に賽したる、前後僅かに一回に過ぎず。

▲雲が畑は文德帝の皇子惟喬親王の閑居し給へる小野の里なりと云ふ。今其の遺跡として傳ふる一寺あり。親王書寫の經卷を藏す。『伊勢物語』によれば、小野の里を記すに、『比叡の山の麓なれば雪いと高し』とあり。然らば雲が畑は小野の里に當つ

可からざるが如し、然れども『平家物語』鹿が谷を記すに、『後ろ三井寺に續きてゆゝしき城廓なり』とあり。今鹿が谷の後ろを三井寺といふは甚だ粗漏也。當時にありては人家少く、随つて山村の特に明記す可き無し。鹿が谷を三井寺に續くと言ひ、小野の里を叡山の麓と言ひたりとすれば、雲が畑は必ずしも小野の里に非ずとも論斷し難からん。

六

▲在五中將の惟喬親王を訪ふの日は、恰も陰曆睦月、雪いと深く降るの日なりとあれば、丁度此の頃此の雪の時なりしと想像すればよし。情景眼にせまりて甚だ憐れ深し。知らず眼前冬山の風光、中將の心憶に如何なる印象をか止めたる。

▲『忘れては夢かぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは』は在五中將の詠『夢かとも何か思はん浮世をば背かざりけんほどぞ悔しき』は親王の詠。一幅の叙情畫也。

▲業平亦畫を能くす。『畫工便覽』の記す處也。和州不退寺中將筆と稱する自影を存すと云ふ。今に此れを傳ふるや如何。然れども業平畫を好むの傳、恐らくは『伊勢物語』記す處の時鳥を描いて女の許に送る話柄に胚胎したるに非ざるや。余は實に然か信するもの也。彼の清盛の女等の描きしと稱する『平家納經』の畫を見るに、其の筆決して凡ならず。畫は當時の紳士閥の所謂紳士閥たる一資格なりしと見るも可也。然らば在五中將が畫を好みたるは眞實ならん。彼のすば脱けた才子が此の餘技を能くせざるの筈なし。業平に冬山の圖ありしやも又知る可からず。

▲『古今集』出づる處の業平の歌、『ゆきかへり空にのみして經ることは我が居る山の風早みなり』は山風激しとあるがゆへに冬山の如くにも見ゆれど、恐らくは冬山に非ざらん。

▲先人嘗て雲が畑を文筆に上したるもの其の例ありや否や、余此れを知らず。近時

始めて並河天民の『かたそぎの記』を見るに其の中雲が畑に遊ぶの文あり。甚だ珍となす。『愛宕の郡小野の郷の山里、法皇の御封なり、谷川いと清く流れたり。香魚を貢として供御に献るとぞ』と記したり。此の風今にありて傳ふ。

▲筆者天民は京師の人なるも其の先は應舉と同じき丹波桑田郷に出づ。伊藤仁齋門下の奇才也。志氣剛決、經濟を以て志となす。仁齋歿後、其の門別れて東涯派と天民派となりたるに見るも其の眼識の凡ならざるを知る可き也。

▲天民、論語の郷黨篇に題して曰く、『畫得。金毛獅子。畫皮不畫骨。那箇這骨。道々。』と。余洛北の冬山を見て、此處に洛北冬山の畫論を爲す。隨想隨筆盡くる處なし。其の骨を畫かず、又更に其の皮を畫き難し。模索不着。已んぬる哉。盡大地一捏を消するなし。筆を放ちて山水を見ん。

三 竿 竹

▲三月十八日、深草穉心庵に於て元政上人の供養ありと云ふ。新聞紙上始めて此れを知る。當日幸ひに事故無くんば本年亦余は草山に彼の三竿の竹墳を葬ふを得可きか。

▲元政上人の學は深くして幽か也。獨り閑寂の草山に退いて詩賦吟詠に心を遣る。三竿の竹聲寂然、此れ實に上人の象徴也、春日淡々、流水悠悠。余の草山を訪ふ。亦頗る微にして凡ならざる可からず。

▲上人諱は日政、字は元政、妙子、泰堂、不可思議等は其の號也。草山の宗教、何れの宗派中にも教へ入れ難し。草山には草山風の別宗教ある也。僧にして俗、俗にして僧、其の元政上人といふもの、亦此れ特別の法名には非ず、俗名を直ちに呼ぶ也。以て學風の一斑を知る可し。

▲性甚だ山水を好むも身常に病多し。徒步健脚自ら諸方の勝を尋ぬる西行の後を追ふ可からず。故に實際見聞したる勝地は甚だ少なかりしが如し。上人曰く、『病に二

有り、心病也。身病也。蓋し心病は神醫と雖も術無し。法界の心何の病か之れ有らん。楽しい哉。』此の信念を以て上人は身病を全く征服し終りたる也。

▲其れが證據には、上人の母妙種尼寛文七年十二月病歿するや、上人の病狀亦同時に希望無く、翌年二月を以て示寂したり。上人の傳記を尋ぬるに、此の病痾を以て殆ど全く母への孝養の爲めに生き永らへたるが如くに見ゆ。

▲余上人の『稱心病課』を愛す。伏見、深草の情趣仔細に味ふ可し。筆を援つて芭蕉の新葉を掃ひ居る上人、病彌々愁かにして窓前夕陽に對し、蓮經を讀む事一二三なる上人、歸雁天外の一聲を聞き、幾回か北望して斜陽に背くの上人、すべて此れ閑寂人の眞生活、何人かよく其の眞味を味はゝん。

▲『春色妍を争うて山野に滿つ。桃紅李白一般ならず』余此れを深草より桃山御陵に至る近傍の風光に見る。『舟中に黙坐して午睡闌なり。覺め來つて覺えず長灘を過ぐ。』余此れを高槻、淀附近の淀川の情趣に見る。漫りに余が旅意をそゝるもの有り。

▲昨春草山に遊び、展觀の屏風を見るに、其の中上人の自書にかゝる日記有り。甚だ珍と爲す。其の中の一節に曰く。上人物を寫さんと欲して一帖を作る。門弟子の其の勞を援け、紙を折り、糸を綴らんといふに、上人許さず。曰く、此の一枚一枚の紙を折る事に多大の修養あり。其の大事の修養を他人に任せて可ならんやと、云々。余深く此の語を腦裏に記したり。

▲上人又曰く、『花月水雲は無用の用なり』と。又曰く、『春水文空しく麗はし。夏雲峰自ら奇なり。若し思議を離れて至らば始めて與もに詩を言ふ可し』と。至言なる哉。

無題録

金公の餘剩價值論

法念寺の和尚さんと、左官やの手傳ひの金公とが朝風呂で落ち合つた。

『此れ〜金公、何んで手前、今日はそんなに景氣よう朝風呂へなんぞ這入つてるんだ。面の皮がたゞれるぞ。』

『おつと待つた、和尚さん。今日は十五日の休みだせ。和尚さんなんざあ、いつも休みみたいなものだから、朝風呂へ許り這入つてるんだらうが、今日なんざあ、ちつたあ他人へ遠慮して、這入りに来ねえ方が功德だらうせ。』

『わしは月拂ひの日參と來てるからな。一日でも這入らなけりやあ損がいくさ。』

『胴慾の和尚さんだなあ。それにしちやあ朝風呂へ這入る和尚さんらと、こちとら

のいつも這入る下水みたいのやつとには、風呂錢にも段々があつてい、譯だな。朝風呂となつちやあ全くこらへられねえ。毛穴の中の土までが落ちて了はあ。

『汚ないことをいふな。その代りに朝風呂は室が寒いや。彼れ此れ差引して了ふさ。』

『勘定の細かい和尚さんにも呆れらあ。それだから横町の長家へ高利を貸したり出來るんだらう。』

『大きにお世話だ。いつぞの様に證文を書く手さへ持たない金公には、一生土いぢりから浮ぶ時はありやあしない。』

『ぢや和尚さんには何が出來るんか。』

『かう見えても第一むづかしいお經が讀めるしさ。金公の土いぢりとは違ふよ。』

『へん、それに端唄の一つも唄へるし、坊主鉢巻のテレック踊りも踊れるしか。』

『金公のやる仕事はいも蟲のやる事さ。』

『ハ、ハ、でも和尚さんはこちとらには頭が上るまい。といふなあ、和尚さんの商賣はこちとらがくたばらなきやあ出来ねえて來てるから。』

宗任の降伏

康平五年九月十七日、武運拙くも阿部貞任は誅に伏し、弟宗任は頼義の軍陣に降伏した。

阿部氏は東北の豪族である。自ら符を發して官物を劫掠し、此の蝦夷近い邊陲の地に、兎も角も出来る限りの豪奢を極めた居た。其れが一朝にして征服せられ、昨日の主將、空しく今日の俘囚である。東北の地霜露の至る事早し。厨川の柵趾に秋風甚だ寒かつた。

貞任は身の長六尺餘、腰の圍り七尺四寸あつたといふ。古今無雙の大男である。其の弟の宗任であるから、流石に兄には及ばなかつたとはいふものゝ、やはり身體

は人並以上に大きかつた。宗任が捕へられて京師に送られるといふ傳令が來ると、京師の公達女官達の間には、何時の間にか大層の噂さが持ち起つた。宗任といふ人間はまるで熊か猪かの合ひの子である様な噂さへ立つて居たのである。

宗任は頼義の軍に従つて、ゆる／＼と東國を京師の方へ送られて行く間、見るもの聞くもの、何一つ、彼が感慨の種ならぬは無い。元來貞任や宗任は武勇一片の没骨漢では無い。其れといふのは、當時京師の官僚の墮落は實に其の極度に達して居た時であるから、多少にも骨つぶしのある、おべつかの嫌ひな人間は、皆な文字通りに野に下つて、東國の曠野に自由の空氣を呼吸した。其れが知らぬ間に東國の氣風をつくり、他の土着の武士の上にも傳染して行つて、東國武士は文にも武にも意氣のある、大膽な男性を振舞ふ事となつて居たのである。

現に貞任の如きは、衣川の戦ひで敗北し、義家に追はれた時、義家が満月の如くに弓を引きしぼつて、『衣のたてはほころびにけり』と唸つたところ、貞任は逃げな

がらも馬上に振り返つて、言下に『年を経し糸のみだれの苦しさに』と返句をしたといふ事である。義家も貞任も皆なちやきくの東國つ子である。

宗任の心には生れて始めて、自由な人間心が眼覺めて來た様の感じがした。駿河遠江の和かな海沿ひを、波のしぶきにむせびながら、何だか自分が一個の順禮である様な氣持ちさへした。身は此れ一個の俘囚でありつゝ、何一つ心に捕はれの無い此の身が、如何許り幸福であるか知れないと考へるのであつた。

京師へ著いたのは、春未だ早いささらざの、梅花正に其の清光を中苑に誇りつゝある時であつた。當時の官僚界は學閥權閥財閥の、こせくした内部争ひ許りに、日を送つて居つた。官はあれども暇で暇で仕方の無い連中は、歌合せといふ遊戯の爲めの遊戯などをやつて居り、生活に心配の無い女官は、退屈しのぎに日記や歌を書いて新しがつて居た。

宗任が著いたとなると、さあ紳士達は大騒ぎである。其れ早速見世物にして伴れて來いといふので、或る日の歌合せの御馳走に、頼義に言つて置いて、俘囚の宗任を中庭の方へ引つ張り廻さした。

或る一人の官僚が庭に満開になつて居る梅花を指さしながら、宗任をからかふ積もりで聞いて見た。

『此の花をお前の國では何といふかい。』

勿論さうした梅花を弄ぶ藝術趣味は、紳士閥以外のものには分りつこが無いといふのが、此の人達の、もう遺傳になつて了つた一つの信念である。さぞ可笑しな發音のアイヌ語が宗任の口から飛び出して來る事であらうと、居並ぶ紳士達はお互ひに目で目に合圖しながら宗任の返辭を待つて居た。

『我が國の梅の花とは思へども、大宮人は何といふらん』

張りのある美しい聲が、全く特有のリズムを爲して流れ出し、晴れた春の日の大空へ、おほらかに消えて行く。と見ると庭の白い砂の上には、熊の様な大男がどつ

かりと蹲つて居た。

隕石

大きな星が、真空の宇宙を何の聲も無く、たゞ静肅にほうつき廻る様子はごえらしいものであつた。其れは性態の知れぬ政治屋の酔ひぎれの様であつた。又其れは大賢愚に近い、判断のつかぬ痴愚の様でもあつた。

途中に眼をむいて見て居た二つ三つの小僧星は、見る間に此の大星に吸ひ取られて了つた。

「不思議！不思議だ！」

或る日の事、此の大星には大星以上の超現實的勢力が働き出したのを自分ではつきりと感じ出した事である。

『何だらう。俺をかう何時までもしつこく牽つばる奴は。』かう考へて見たが、大星自身にはどうしても其の超現實的勢力の得體が知れなかつた。併し其の走つて居る勢力は刻一刻と加はつて来る。大星はハア／＼とせはしい息をつかなければならなかつた。

『ブスツ。』一寸した音がして、何かふは／＼した海月の様なものを突き飛ばしたと思つたら、それは子供の手から逃れ出た安つばい風船が、雨に逢つてびしょ濡れになつて居るのだつた。

『ビショ／＼／＼／＼。』何か知ら薄汚い、大根おろしの様なものが、顔にくつきき出したと思つたら、其れは人間の勇ましい飛行機をさへ突き落とし兼ねない、誠に濃密な雨雲がすつかり氷つて居るのだつた。

併し大星の走つて居る速力は刻一刻と加はつて来た。今ではもうハア／＼息をつく位では追つかない。

大星はすつかり上血して了つて、何が何やら覺えの無い事になつた。上血は終に

其の危険時間をすら経過して、彼れ大星をして無残なる空死を演せしめた。空死は今や既に一の火葬にすら變じた。

『星が燃えるよ。星が流れるよ。あゝ、美しき星の流れ。』

コスモスの様な地上の詩人は、其の時澄み渡つた夜空を仰いで、かう讚嘆したのである。

『何年何月何日、□□縣、□□郡、□□村へ落ちたる隕石』

かういふ立札がついてA博物館へ陳列せられた隕石が、此の大星であつたとは、コスモス詩人よ、恐らくは君も知らなかつたであらう。併し其の隕石には、多分の金が含まつて居るといふので、拾ひ主と土地の持ち主とで、其の所有權を大いに争つて居るといふ事が新聞に出て居た。

新 皿 屋 敷

旗本の家に一人の女中が居た。顔すつかりのあばたを除け物にしても、豚の様に肥え、あひるの様にえか〜と歩く様子は、世にも珍らしい不器量の女である。家人などの中にも、流石に此の人に手を出さうといふ程の物好きは居なかつた。

或る日大變な事件が持ち起つた。それは此の旗本の家に代々傳はつて來た家寶の皿を、十枚の中一枚だけ、其の女中のそゝうで割つて了つた事である。

家人達も狼狽したが、當の女中はもうすつかり青くなつて、今にも殺されるのだと觀念し切つて居る。

併し青くなつて居るのは、ひとり此の女中や家人達だけでは無かつた。旗本自身も實はすつかり眞青になつて恐れて居るのである。

『惜い此の女中を井戸の中へでも斬り捨てようものなら、其の亡靈が自分を取り殺す事は知れたことだ。』

旗本はもう、女中の顔を見て居てさへ病氣になる様な心地がした。女中の顔が亡

靈になつて見えてさへ来る。

『解雇したら、やはり此の皿の爲めだと思ふだらう。どんな井戸へ自分から飛び込もうものでも無い。其の恨みがこつちへたゝる。』

壊された一枚の皿の事などは忘れて了つて、旗本はたゞ女中の顔を見るのを恐れ居る。併し何とか相當の罰を與へねば家法が立つて行かない。三太夫は頻りに旗本の直裁を仰いで來た。

『殺すのは無論いかない。といつて解雇するのも後の恐ろしい事だ。さうだ旨い仕方を考へた。あの女を一生自分のところで無給の妾にして使はう。それが彼の女を一等侮辱する仕方だ。』

大飯食ひの自由畫

おい。素的なもんぢやあねえか。シュミット中尉の飛行機が烟のやうに、すうつと

空へ揚つたと思ふと、其れ得意の木の葉落しだ。錐揉みだ。妙齡のバア嬢が飛行機の翼に這ひ出て來て翼の上に逆立ちする。飛行機は其の逆立ちを載せたまゝで御自分もくると逆立ちをしさうになる。ようつ、あぶねえ。あぶねえ。と手に汗を握つて居ると、さうだ手前。旨えもんぢやあねえか。コバルト色の空にバラリと赤い落下傘が開く。嬢は四百呎の高空から、そいつで靜に地上へ下りて來ようつてえ仕掛けだ。さうだ旨えもんぢやあねえか。

『やい大飯食ひ。さうだ手前え。コバルト色の空に赤い落下傘がバラリと開いて、見物の膽を打つたまげさせようつていふ仕掛だ。旨えもんぢやあねえか。手前見たいな齒切れの悪い奴にやあ飛行機の振り出しでも飲ましてやりてえなあ。』

其んな大きな振出しを飲ませられても閉口しさうに無いといふ様な顔をして、大圖體が板の間か廊下か分らぬ様な處にごろりとなつて居た。

『あゝ、あゝ。』

股の裂けた馬鈴薯の様な格好に裸かとなつて居る大飯食ひのみぞ落ちのあたりは一息毎に海嘯の様な波を打たせて居る。

おい。素的なもんぢやあねえか。鼠小僧次郎吉がバラ／＼と駆け出すと、『其れつ泥棒だつ。お庭へ出た。』といふ聲が後から續く。『生體は此れだいつ。』と用意の鼠を投げ出すと、『鼠だ、鼠だ。鼠小僧を掴まへろ。』とベストの時節でもあるめえに、融通の利かねえ鼠なんかを追つ驅け廻して居る。其の暇に手練の早業だ。柳の枝から高屏、高屏から屏外へと、身體はもう表へ出て了つて居る。『神妙にいたせ。』オイごつこい。此れは中村甚五兵衛の辻番だ。外の辻番たあちつたあ筋が違はあ。『待つて下さい。私にやあ今が年貢の納め時なんだが、今夜は人一人救はにやならん仕事がございます。其れを果してから又屹度此處へ戻つて来てあなたの繩にかゝります。何につ、出来ないつ。出来ないとありやあ此方も其の腹だ。掴まへられるもんなら掴へて見ろ。』ブツツと繩を切つて了ふ。後は一目散。とつ／＼と茶店の親子の處へ歸

つて来る。どうだ手前。素的なもんぢやあねえか。見て居ろ。出来ねえとありやあ此方にも其の腹があらあ。ブツツ。

『やい大飯食ひ。手前えなんざあ直ぐに引つ掴まつておさむらひのお慰みに合はうつてえところだ。ちつたあ廻向院へお参りをしねえ。』

大飯食ひの左の足が一つゆるぎ出したと思ふと、ブーンと血の香りがする。小さなぶとが一匹潰されて居るのである。左の足をゴトリと又板の間へ投げ出す。

『あゝ、あゝ。時に若旦那。わつちにやあ「大飯食ひの自由書」つてえのが書いてござんす。ちよつくら此れを讀んで貰ひますべえかな。』

*

*

*

*

*

『むかし／＼の大昔、いきものは皆んなで共喰ひの喧嘩をして居つた。大飯食ひがゆつくりとおいしいものを食べて居るのは、甚だあぶなつこしい、ちよつと出来ない藝當であつた。處が或る意地汚い動物が反芻といふ方法を發明した。あんな

り食べ過ぎて木の蔭でグロ／＼やつてると、其れを外へ吐き出すのは惜いものだから、又其れをペロ／＼と食べ込んで了つたのが反芻方法の發明である。併し此の萬引野郎の出たにも氣の毒な點があると私は思ひます。反芻動物はまる／＼と太つて行きました。するてえと人間といふ又一段づるい奴が出て来て、反芻動物を自分の宅へ連れて行き、さん／＼御馳走を喰はせた擧句は、其の肉を喰つたり、其の乳を盗み取つたりしました。此の動物の小學理科書を見ますと「牛の效用、肉、乳は食用に供し、毛は刷子に、皮、蹄、角、骨は工業用となる。身體の部分の一として使用が一つ落ちて居ます。牛の角に松明をつけると敵陣へ追ひ遣つて戦さの勝利を得ます。するてえと又人間の中にも善いのと悪いのとあつて、いろ／＼の喧嘩をし出した。悪い奴はぐん／＼大飯食ひになつて行つた。此の邊は書くのが少しうるさくなつたからよします。するてえと又私の様な大飯食ひが出て、若旦那からお扶持を

戴いて一日中ゴロ／＼と寝て居ることになりました。するてえと若旦那さま。私は此の世界の最終に出て来て、最も進化の程度の進んだ生物です。』

雑 草

増 上 縁

一

冬になつて室内温度を取る爲めに私は石炭を使つた。ハイカラだからでは無い。木炭よりは其の方が遙かに經濟だからである。處が私の家は市街からはずつと離れた處にある爲めに、石炭屋が容易に石炭を運搬してくれない。受取つた金まで返してよこした。無理も無い。新聞屋は新聞配達を断つて了ひ、今では直接購讀をやつて居る。併し郵便だけは感心に、五厘切手を貼つたやつでも雨嵐の中を宅まで持つて來てくれる。

大いに弱つて居ると、或る一軒の可成りに遠いところにある石炭屋だけが神妙に持ち運んで來てくれた。甚だ有りがたかつた。此れは實は家のものが其の邊へ聞きに出て、『いつち正直の炭屋』といつて聞き廻つた時に、何の家でも一致して教へてくれた店だつたのだ。『成る程正直にやつてくれるなあ』と、まあ自分勝手の批評ではあらうが、やはり都合がよいから其の店を褒める一人に私も加はつた次第である。

私は思つた。世間はすべて此の通りにして渡らなければいけない。我々は世間から大層な御恩を受けて居る。數へて見ると、彼の人、此の人と何人でも指を折る事が出来る。私は昔はさうした御恩を受けた人の名を日記帳の始めへ書き記して置いたりした。併し其等の恩人へ一々個別的に御恩返しをしようと思つて骨を折つて居ると、どうも自分の行動が窮屈になつていけない。第一さうした恩人の前へ出た時に、自分の行動が因循になつていけない。かう言つたら、かうしたら、其の人の感情を害しはせぬかと惧れて居る。それから、かういふ風にして居ると自分の行動は

其の御恩報じにすつかり費されて了つて、全體としては甚だ乏しい仕事を社會へ提供する様になつて居る。此れは餘程考へ物だなと私は考へ直して見たのである。

二

私の頭にふつと『増上縁』といふ言葉が思ひ浮べられた。何が増上縁なのだか、はつきりも分らないが、丁度其の言葉が此の場合には都合よい様に思はれたのである『なる程因陀羅網の重々印現かな』とも考へられた譯だ。

御恩を受けたから御恩を返す。馬鹿な。貴様にどうして其の御恩が返せるか。其れほど偉い力を貴様は持つて居る積もりか。あゝ分つた、分つた。御恩は諸方からいくらでも受けられるだけ受けるがよいのだ。そして其れを受けても平氣な顔で受けつ放しに過ごせばよいのだ。『貰つたから返す』。『返して貰ふ爲めに與へる。』さうだ此の考へこそは現代社會の墮落を招いた第一原因であつたのだ。

自分は自分の出来る限りを盡す。其れがすべてだ。あとにはもう何にも無い。自分の盡す合手が誰れであるかを自分は考へまい。甲から受けた御恩を直接に甲へ返さうと努めるのは、自然の法則を任意に支配しようとする無駄骨折りである。自分はおもつと自然に従順にならう。兎に角小川の上流から小舟を浮べて見よう。何處へ流れ寄るか其れは知れない。流れ寄つた乙がどんな關係で又甲と結びついて居るか其れも知れない事だ。

小學校を卒業する時、私は其の先生へだけは今後一生涯に亙つて毎年の年始に報告の手紙を書かうと思つた。實際七八年間は其れを繼續した。そして自分が多少づゝでも其の先生より偉くなつて行けば行くほど、かうした行ひをする事は世間の所謂美談だと思つたのである。併し私はもう其んな小さな趣味を廢して了つた。自分が特別の御恩を受けた人へ、毎年一通づゝ特別の報告書を書く。あゝ無意義の骨折りを考へたものだ。

三

増上縁を私は両方の意味で考へて居る。よい方と悪い方と。

電車の中で足を踏まれて居る。踏まれて居る身にして見ると随分痛い。大抵の人は踏まれた瞬間に特別に大きい聲を出し、顔をしかめなどして『痛い』と叫ぶ。合手が謝罪するともう直ぐに平氣な顔をして居る。併しさうした場合に聲も立てないでじつと我慢して居たとして見る。

痛いのは随分痛い。聲を立てないで居ると尙更痛い。早く足を取つてくれさうなものだと思つて居るのに少しも其の様子が無い。そろ／＼我慢が出来なくなつて来る。腹さへ立つ。其れでも黙つて居ると、又合手の人はどうかした拍子に、前よりは強くぐつと踏みつけた。勘忍袋の緒はすつかり切らされて了つたので、合手の人をねめつけて、『どうしたのです。人の足を踏んで黙つて居るなんて、さつきからも

う大分我慢してるのぢやありませんか。』と顔さへ眞赤にして来る。

私達は人生の中でかうした場合に屢々出くはす様に思ふ。足を踏んだ方の側にして見ると、足を踏んだ位で何んで此んなに憤るのだらうと思ふ。踏まれた方にして見ると、もう此れ以上に我慢の仕方は無いのである。

自分の知らない間に自分のした事でそれだけの苦痛を他人に與へるか知れない。其れは自分の全く知らなかつた事でもあるし、又一々の行爲をさう末々の結果まで尋ねる譯にはいかなない事だから、自分に責任は無いといふものゝ、併しさうした知らない間に他人に與へる自分の過誤を何處までも悞れて行きたいと思ふ。

『實はあの時、随分氣色が悪かつたけれど言はなかつたのですがね』など、後で言はれると、其の時に直ぐにはつきり言はれたよりはすつと耻づかしく、過去の自分を振りかへる。そして其の人を何か奥深い、侵す可からざる人の様に見上げる事さへあるのだ。

四

私は以前よく他人の手紙を讀んで感じを悪くしたり、或は善くしたりした。『此んな言葉を使ふのは失敬だ』とか、『何んだか奥歯に物のはさまつた様な言ひ方だ』とか思つて嫌な気分になる事がある。そして其の返事を書く時には多少其の感情の反應を見せて来る。

處があとで其の人と逢つて見ると、其人は微塵もさうした嫌な態度を取つては居ない。非常な親切さを見せてくれる。ちよつと狐にばかされた様な形である。其れから私はだんく、考へる様になつた。

聞いて見ると、誰れしもさうした感じを持つものゝやうだ。殊に大弱りをする事のあるのは、自分の手紙が同様にさうした誤解を受けて居る場合である。少し前の事であるがやはりさうした場合があつた。『貴方の此うした言葉を大變重大の事や

うに言つて居ましたよ』とか『此んな言葉をいふのは失禮だと言つて憤つて居ました』とか、脇で聞いて居た人が言つた。聞いて見ると全く馬鹿々々しい誤讀をしたものだ。

だが私達は始終、自分の手紙、言葉、態度などでさうした悪感をちら／＼と他人に與へて居るに相違無い。其れは全く自分の關知しない事だ。偶然にさうなつたので、言はゞさう感ずる人の方が悪いのだ。併し其れだからと言つて、私は飽くまでもさうした場合の自分を無責任だと感じて居ない。

此んな小さな原因がお互ひの間に積もり積もつて行つて、しかもお互ひが其の場合々々に少しづつ退却して行つたとすると、取返しのかぬ大事件をさへ醸す。大抵の事件は一舉にして来るもので無い。増上縁の積聚こそは人生の大事を決して居る主原因であると私は思ふのである。

ヘルンのこと

私の書齋(といふよりは寧ろ私の居室)にはラフカディオ・ヘルンの小さな寫眞が掛けられて居る。此の寫眞は私が東京での學生時代、京都での其れを通じて、或る時には寄宿舎の殺風景な室に、或る時は庵室の孤獨なる壁に、同じ框の中に箬められて、同じ様な格好に掛けられて来たものである。東京から京都への引き移りの時其の上硝子は壊されて了つて、今では其れに硝子さへ箬められずに、其儘寂しく壁に掛かつて居るのである。

私は元來頗る我儘に出来上つて居る。野原の中に一人で勝手な事をして暮らさねばならぬ様に出来上つて居る。誰れの生活を模範にして暮らさうと考へても、大分に偉い精進的の人は私の崇敬の的にするに少し息苦し過ぎる。日常の會話をするに

さへ、さうした偉い人とは、息苦しくていつも弱る方なのである。其れで私はカントだとかマルクスだとかいふ偉い人の寫眞を壁に掛けて居ては、どうも毎日の生活が壓迫される様で苦しくなつて堪へられない。

よい文章、よい學問をしようと思つてもやはり同じ事だ。『此處が悪い、彼處が間違つて居る』とやかましく言はれると、自分は却ていぢけて了つて何も出来ない。

さうした自分がヘルンの寫眞をかけて何年も経過するのは不思議な氣がする。ヘルンを自分は何も非常に偉いと考へたのでも無ければ、又ヘルンの様にならうと思つて居たのでも無い。たゞ何と無くヘルンは此の人生を渡るに同行二人の他の一人である様な感じがするのだ。心置き無く何でもを話せる友人の様な氣がするのだ。

私はヘルンの寫眞を見上げた後雨の日の外の麥畑を遙かに見渡す。其處には廣い野原と、周圍を取圍んだ静かな山並がある。そして其處にヘルンが『おい君』と呼んで居るのを感じる。人生は長い長い旅程の一部だ。其れが我々の死を以て終りを告

げて居ることも思へない。如何なる土地、如何なる地位も、たゞ一つの假りの世である。

二

ヘルンが京都へ来て、其の邊を見物して廻つた日記がある。仙洞御所を拜観して外へ出てから、俤に引つばられて、其の近傍の汚い小さな西洋料理屋へ上り、中食を食べたといふ記事がある。其の料理屋の記述を見ると、私は其の當時の未だ日本と西洋とくひ合つて居ない、一つの雰圍氣をしつくりと感ずる。

安つばい石版印刷書の額面、こはれかゝつた樂器、食器の皿について居る、印象の乏しい西洋式の模様畫、何から何までが明治も二三十年頃までの空氣をたゞへて居る。其處にひよろりとした、旅人の——さうだ永久に人生の旅人であつた——ヘルンが、市街のいきれに疲れた様の顔をして坐つて居る。誰れ一人として此の旅人

が後に世界に有名となつたヘルンだと知つて居るものは無い。——私はかうした畫幅を思ひ浮べて、堪へられない様にヘルンが懐かしくなつて來る。

其の料理屋は今の何れであらうか。私は相國寺の後ろに居た時、よく此の御所の中を散歩して、其の事を考へた。其れが私の行きつけて居る料理屋であつて、ひよつこり其の食器の皿の模様を見つけ、暑い珈琲の一杯でもすゝつて、其の儘黙つて歸つて來るのであつたら、何んなにか面白からう。なごとも竊かに考へるのであつた。

ヘルンは自分の書いた文章を机の引出しへしまつて置き、長い期間を置いた後取出して見て、よいものだけを發表したといふ。如何にも筆者は其れを書いた瞬間には其の文章の何れもがよい様に見える、客觀的の批評を加へる事の出來ないものである。私もさうしたヘルンの心使ひを眞似したいと思つて居るが、どうしても出來ない。今日書いたものを今日直ぐ雑誌や新聞に送つて居る。いや場合によつて明日書かう

と思つて其の準備をして居たものをさへ、急の依頼で今日其の人の待つて居る間に直ぐに書いて了ひ、碌に読み返すでも無く其の人に手渡しする事さへ何度かある。私はかうした自分の生活を甚だ不健全であると思ふ。何とかして其の生活の整理を斷行しなければならぬと考へて居る。

併し其れは何も物を書くといふ事だけに關して居ない。私達のすべての行爲が、一々の欲望や感情を今直ぐ反撥するといふのでは無い様にした。むかつと起つて來る感情や、押しせまつて來る欲望やを、其の時は兎に角机の引出しへしまつて、さて後でゆつくり取出して読み直して見るといふ事にしたら、どんなに立派な事であらう。隨て私達の人生も其の時にはどんなに清らかな、又穩かのものになつて行く事であらうか。

贈物

私への贈物！何といふ立派な花だ。私はどの一つ一つにも見とれて居る。此の物狂ほしい天氣に、すつかり私の心をしづまらせてくれる花だ。今日丁度私は私の爲す可き仕事をはたして一と月の大安日だ。私はお前達と一緒に愉快に遊んで暮らさう。日まわりのやうな赤い大輪。青空を吸ひ込んだかと思ふ濃紫にたゞようて居る小さな花。葉の白く大きなのも、豆のやうな黄の花も。どれも此れも私は好きだ。此の高貴な香りを、お前達が出して此の室を賑かにしてくれるのかね。しかし私は田舎ものだ。お前達がさうして貴族的に私を嘲弄するのだけを私は好かない。いゝいゝ。其れもお前達の罪では無かつたのだ。何んでもよい。私はお前達と愉快に遊ばう。

收穫

あつちでも麥をたゝいて居る。此つ方でも麥をたゝいて居る。子供等は大麥の刈

り取られた畑の中を大よろこびで走り廻る。むしろを持ってお母さんのあとを追つて居るのもある。隣りの畑の子供等がみんな一緒に鬼ごつこをやる。畦を飛び越え飛び越えして走つて居る。『豆を倒さんやうにおし』とお母さんからたしなめられて居るのがある。やがて麥たゞきの音も大分に静かになつたと思ふと、あちこちでは麥稈を山のやうに積む。よい麥稈の香りだ。丁度夕日は山の方へ落ちて行く。まるでミレエの繪だ。空がすつかり暗くなつたところで、子供らは麥稈のたいまつであちこちへ火をつけて廻る。朝からそれ許りを待つて居たのだ。火を持って、はねて、はねて、はね廻つて居る。やがて火がついた。ぱち、ぱち、ぱちと麥稈がはじく。わあつとときの聲をあげる。大野の何十箇所でも火が燃える。野の果ては眞つくらで畑だけがなびく。あゝ、まるで大露西亞だ。大露西亞の野が此れからつくののだ。ツルゲーニエフの枯草の香りがなつかしい。

美しい雪洞

『此の原つばは何といふ暗さでせうね。』

『さうだ。まるで瀝青のやうな暗さだ。何かのしめつばい臭ひが絶えず土の上を傳はつて来る。』

『先きの知れない原つばを歩くのは、随分あぶないものですね。』

『さうだ。あぶない。しかし却つてそれが落ちついて、愉快な氣もするでは無いか。』

『原つばには、今誰れも人つ氣がありませんね。』

『さうだ。誰れも歩いて居る筈が無い。此のくらさと、濕つばさだ。』

『おや、あの美しい雲洞は何でせう。まるで盆燈籠のやうに明るいのですね。あそこへよつたら随分綺麗でせう。』

『いや、待て。あれは美しい雪洞。誘惑の雪洞。文明の骸骨が今此の大野に裸踊りをやつて居る。——あれは発電所なのだ。』——

かういふ會話が、大野の闇からひそかに聞えて来る様に私には思へた。

明石漫筆

愛は努力である。併し又同時に愛は自らなる流れである。

愛は努力である。努力無き愛は考へることが出求ない。併し此れは愛即努力だと言ふのでは無い。例へば水栓のボタンを押す様なものである。水栓のボタンを押す努力が強ければ強いだけ、迸る水の力は強められる、自らなる流出の力は強められる。

愛が至るところ宇宙に充ち満ちて居ることを考へるとき、自分は此の愛が到底經驗的の我々のどうともなすことの出来ない、或る知らぬ力強いものに關係を持つ

て居ることをはつきりと感ずる。其の力強いものを神と呼ぶならば、神と呼べ。自分にはまだ所謂宗教から、此の神の實在を求めようとする要求は無いけれども。

自分に盡してくれる他人の親切が、もし功利的の動機から出て来たものであつた場合には、特に其れが露骨に自分の知性にわかる場合にはどうであるか。自分は此の愛を不純であるとして拒絶するか、其れとも黙つて受け入れるか。私は思ふ。其の他人の動機はたとへばそんなに不純でもよい。其處にはやはり人間の愛が現はれて居る。其れは神が私といふものに親切を盡してくれるのだ。神が此の人の手を一時借りたに過ぎないのだ。此の人の手は即ち神の救ひの御手だ。即ち此の人の御手も亦淨められて居る。此の人の御手を淨めると淨めないとは、自分の受け入れ方一つに責任が係つて居るのだ。

世界に幸福と言ふ或る定まつた形が凡そ見られるか。又同様に、不幸と言ふ或る定まつた形が凡そ見られるか。

幸福は幸福だと信じないものにはいつまでもやつて来ない。

「上を見な」と言ふ言葉がある。併し此れは實は「下の不幸を見な」と言ふ言葉である。

私を征服した時に、其の人の自負心を満足せしめて、快感に耽らうとする他人がある。反感に満ちた私の肉體を其の人に投げ與へるとき、如何にも其の人の自負心はよい餌を見つかることだらう。神に遍満した此の永恒體を其の人の前にひざまづかせるときには、其の人の期待はすつかり裏ざられ、負けて醜い自分の形骸をまざぐと見かへるに相違無い。

他人の愛は、何でもを本當に心よく受け入れる可きだ。

*

日照雨が一滴力強く落ちた。其の通る路は瞬間的に白く輝く。

白い輝きは、何とも言へない、或る本體的のものゝ輝きを見せて居る。此れは一

滴の雨の輝きでは無く、一滴の雨の通り過ぎたあとの輝きである。

宇宙の本體は永恒に其の姿を見せない。又其れは永劫に其の姿を見せて居ると言つてもよい。かうして瞬間的に宇宙の靜が破られて動となり、動が直ぐに永劫の靜に返つた時、其のどきに結晶の晶骸とも見える宇宙の本體が、不用意に人間の眼に其の姿をさらけ出し、又急に狼狽して其の姿を隠して了つた様に見える。私は宇宙の此の不用意の瞬間だけをねらつて居る。

しかしよく見て居れば至るところに此の不用意がさらけ出されては消え、さらけ出されては消えて居るのだ。

私は其の動きに直ぐ隣りする輝いた陰影を詩の見つめる世界だとする。

夏蜜柑が揺れる。日の中に立つて強い風を浴び浴び、左右にひざく揺れて居る。

揺れる其の動きのあとからあとから直ちに輝いた陰影が數限りも無く、速かに現滅して居る。其れは餘りに數多くの陰影である。萬花鏡を覗いて居る様に、銳角三角

形の輝いた斜面が、びか／＼と反映し、奪つたり、乗しか／＼つたりして居る。其れは本當にいゝ崇巖だ。

土塀の蔭から黄いろい、青い、落の臺が芽ぶいて居る。二本芽吹いて居る。落の臺は各々澤山の黄いろい、青い鱗片に取り圍まれて居る。其の鱗片が皆んな張り切れる様な生長力を藏し、又張り切れる様に其の生長力を働かせて居る。そして其の生長力の蔭には例の輝いた力の陰影が大空眼がけて打ち合つて居る。半圓、楕圓、拋物線、双曲線、其の外いろ／＼の弾力に満ちた力の虚線が、生長のまわりに打ち合つて居る。磁氣の嵐の様なものだ。其れは本當に有りがたい淨土だ。

其んな無用意な本體の曝露は、ほんの瞬的のものだ。詩の形は出来るだけ短かいのが眞實である。

内容を離れて、概念だけの詩のリズムと言ふものが考へられようか。三十一字だとか、十七字だとかの概念のリズムの中に内容を盛り込まうとすることはほど無意義

なものゝ又とあるまい。

リズムは神のものである。神の自由がリズムである。

我々が輝いた陰影を見詰め、見詰めして行くことは、自分を神のみもとに歸らせることだ。詩を感得するのは、神への正しい勤求である。

*

自分の趣味性をちよつと満足させて見たり、他人にちよつと感心させて見たりして生きるのはたやすいことだ。其れが、藝術であり、學問であり、經濟であり、政治であるにせよ。

宇宙の仕事を補ひ、神のみこゝろを全くする仕事をしようと思ふと、爪を抜いて土を掘り、火無くして木を燃やす様なむづかしい事業だ。人間もさう思ふと下らぬ道草も容易に食へなくなる。

曼茶羅詩章

*

あたりすつかりの麥の浪、大麥は棕櫚箒の様なあたまを彼方此方へ振り立て、小麥はのつべらぼうの散切頭を、まだ早い朝が眠たさうにぼんやりと立つて居る。田舎者の様に無器用に立つて居る。彼方には蠶豆もある。菜種もある。菜種はもう直きに誰れか刈りに来るのだらう。

浴びる様な大麥の浪。浴びる様なあたまの幸福。何物をも持たないもの、持つ此の幸福をおよそ誰れが知るか。

何處へもぐつた雲雀か。何處からとも無く、びいよろ、びいよろ、びい、びいよろ、と聞えて来る。と、すつと遠い先方からも同じい、しかし聲の小さい、びいよろ、びいよろ、びい、びいよろ、が聞えて来る。菜種の上を白い蝶がかすめて飛ぶ。

電信柱から、物干しの竿、物干しの竿から茄子を植えた麥の畝と、じゅんぐくに飛び移る澤山の雀ら。ばつと飛び散つては、又不意に、思ひ出した様な止まり方をする雀ら。麥の穂の畝から麥の穂の畝へと、雀らはハアドル、レエスをやつて居る一畝越えては又止まり、二畝越えては又止まり、今は麥の穂の中へ隠れ込んで、仲間と隠れんばのおいたをする。

ちゆ、ちゆ、ちゆ、ちゆつ、と寄り添うて来て止まる一本の大麥は、小さい雀の重みに堪へないで、穂の尖きからすうつと地べたへ腰を曲げる。と、雀はびつくりした様に、又ちゆ、ちゆ、ちゆ、ちゆつ、と飛び離れて、別の一本の大麥に寄り添うて止まる。此の麥も同じ様にするりと肩車に乗せて、雀のおいたを逃げて了ふ。と雀は、ちゆ、ちゆ、ちゆ、ちゆつ、と何處までも、何處までも、麥の穂を尋ねて飛び立つて行くのである。

ふつと私は、竹の枝にすがつて危い城中を逃れ出た阿若丸の奇智を思ひ浮べた。

と、其れは又私等が子供の時によくやつた二重の圓陣をつくり、其の廻りをどうどうめぐりする、一種の鬼ごっこでもあつた。と、其れはお婆さんの首つ玉へぶらつ下り、『よう、おんぶしてよう。よう。』としなだれよる、子供のだゞつこでもあつた。

紫野より

籐椅子

— 學兄

宗教體驗號をお出しにならうといふ學兄のお心がわかる様に存じます。私は今朝から晩まで可成りに讀書をして、今は餘程疲れて居ります。どうも毎日どの位かづ、緊張した讀書と思索をしないと寝付きが悪くて仕方が無いのです。今は快い疲労です。静かに、物が考へられます。併しかうした疲労の後、夜になると頭が大分鈍つて来て居りますから、どんな物が書けるか一寸心配して居ります。健康を悪くして後といふものは、實のところ夜は、餘り調べ物をせず、論文などは全く

書かないことにしてあるのです。

二

—學兄

私は近頃諸地方へ講演に参りますと、屢々若い人達から宗教に關した感想を話せと命せられます。併し其の都度私は顔の紅くなる様な、何だか自分の良心をあざむいて居る様な面はゆさを感じるのです。何故といふに私の近頃の言葉は其んなしつとりとした、涙にぬれた様な、感激に満ちたものではありませんから。ところが世間で普通に言つて居る宗教體驗といふのは、さうした感激に充ちた、びち／＼と反撥するところのある様な經驗だけの様です。私にさうした感激の言葉を求めて居る人達に、強いてさうした言葉を發したくないとすると、私は随分氣恥づかしい感じがするのです。

經驗は議論ではありません。私は度々經驗することですが次の様のことがあります。何か突然嫌やな事件が起きて來ます。氣の小さい私にはどうしても其れが心配になつて仕方が無いのです。其れをいろ／＼と考へて見ると、臃ろ氣ながらも何等か解決策がついて來ます。かうすればかう、あゝすればあゝ、と言ふ解決の筋道もついて來ます。其れで理窟の上ではすつかり安心して了ふのです。併し私の經驗は何處までも安心してはくれません。讀書などと注意が一方に集中して居る其の留守中を見てか、殊更に此の不安は *sub-consciousness* の中を掻き廻します。かうした經驗の不安をどうしても理性は征服することが出來ないので。感激に充ちた經驗も疑へない一つの經驗です。感激の無い、秋の葦の様にさびれた經驗も疑へない一つの經驗です。

私も嘗てはさうした痛ましい感激の幾つかを経験して來ました。其れだけが間違ひの無い宗教的體驗だと思つて居ました。併し私の様に弱少の肉體を持つたものは

何度と無く死の宣告を受けて居る間に、もうさうした感激が一度々々自分の運命に就いて湧いて來なくなりませう。何と言ひませうか、自分のかけて居る眼鏡の曇りを（私は眼鏡をかけては居りませんが）何度と無く取り外して其の曇りを拭うたといふ様の感じゝかしないのです。もう此れは私に宗教が無くなつたのかも知れない。或る意味から言つたら確かにさうです。いやさう思へばこそ、私は面はゆい感じがするのです。併し私がかうした経験を、此れは又誰れにも言説で傳へられない或るニユアンスを持つてしつかりと把持して居る、いや寧ろ其れが自然に懷かれて居るといふのも、偽ない経験です。そして此れが前の感激の生活と何の關係も無いものだと決して思つて居ないので。

三

私は毎日大抵在宅致します。近頃になつて外出の用が頻繁になつて來ましたが、

兎に角私の研究室へ這入つて籐椅子に身體を埋めて了ふと、何とも言へないゝ氣持ちになつて了ひます。私の前の自然は本當に奇麗です。此處は京都でも特別いゝ景色の方でせう。そして私の周圍には今本當に澤山の幸福があります。此んな幸福が自分を圍繞するのは不思議です。そして此の幸福は誰れの爲めでも無い。皆んな自分の周圍の人達に迷惑を掛けたお蔭のもの許りです。其の種々の経過を考へて見ると、私の歴史も随分と長く、又随分と變化があつたといふ氣がしみるゝと致します。と、其の次の瞬間には私はかうした周圍の人達の御恩も、亦自分の幸福も別段有りがたいとも嬉しいとも思はぬ様になります。そして又平氣になつて其の周圍の人達に奉仕の無い片務的の迷惑を掛けやうと考へて居ります。此等の迷惑は皆な私が報償することの無い片務的のものとなつて止まつて居る間に、私は深い落ち葉を被つた様にして其の儘死の床に横つて了ひませう。併し其れでも私は敢て理不盡だとも何とも思ひません。又私があうした勝手のことをやつて死んで了つたところで

後で私を憎むものも無いに相違無いといふ安心が伴つて居ります。實に甚だ憎む可く、悪い處世法です。其れで居て私はたゞ落ちついて、頭の中を清水の流れる様な澄んだ心を持ちます。

例の憂愁はかうした間も、幾日か置きには襲うて参ります。又やつて來たなど思ふ位で、私は其の日は不機嫌な顔して言葉少なに暮らすだけです。此の方の制御も習ひ性となればもう其れほど心配では無くなりました。

隣りの極く小さい應接室には『見花則以花爲心、見月則以月爲心』云々といふ澤庵の額が掛かゝつて居ります。(といふと大分貴族的に聞えるが、實は此れは死んだ或る禪僧のものをあづかつて居る譯です。)私は讀書に倦んだ身體を時々此の室へ運んで、(と言つてもたつた三步か四歩で)椅子に腰かけ、何とも無く、前の花瓶の小さな花を眺めます。物も何も言はずに黙つて居て、しばらく立つと又黙つて研究室の方へ歸つて其のテエブルに向ひます。

何もありません。此れがもうすべてです。

四

私は毎日の様に詩作を致します。其れは自分をつくる上の一つの修養だと思つて居るのです。感激の無い生活には詩ももう出来ないものと思つて居りました。併し今は其の無感激の中から無感激の詩が生れます。その詩の題材は又た々周圍の山々だけです。同じ山々を私は何度でも詩にしようと思ふのです。

長椅子の上に地圖を開いて

すつとまわりの山々を眺めわたす

それ々の名前の美しさよ

一つくに見つめ入る

お前たちは私の條痕板だ

嗚の如くに語る

研ぎ出してぐつと引つばる

その一線を見つめよう

一つ／＼に見つめよう

*

空が晴れ

雲が流れて

大空は見上げる限り青く輝くとき

比叡よ、お前ははじめて本當の力を見せて居る

がつしりと踏みこたへ

悠々と胸をのべ

お前は見る限りの山々に雄飛する

比叡よ

私は今はじめてお前のえらい姿を見た

横高、水井よ

お前の冷酷も今日は淺薄に見える

そして自分に近くなつかしい

お前の酷薄な體軀にも

此の深い雨のあがりかなやましいか

その青黒いかげりと

空横走る止まつた雲と

お前は憂愁におそはれて居る

大文字の空には短かい虹の切れつ端が

あがつた今だ

紫野より

比叡、横高、水井、大文字、皆んな周囲の山の名前です。

此んなことを語るのは氣恥づかしい感じが致します。怠惰な生活だと言はれれば其れでも致し方ありません。學兄の御批判をお願い致します。宗教體驗號といふものに書くとしたら、昔の私は兎に角、今の私はたゞ此れだけの日常茶飯事を申し上げるより外のことは無い次第です。

月 明

—學兄

學兄のお葉書は月明の中に書かれたとあります。私も今此の通信を月明の中に書きます。近頃は殊に月の光が澄んでる様です。

實は只今夜(夜の九時四十分)幾つかビズネスの手紙を書き終へたところです。少し氣がそはくして落ち付きません。といふのは、かうした手紙を幾つか書いて居ると、其の間の時間が大變惜しいので、出来るだけ簡潔に、又出来るだけ速く書き上げるのです。其れでビズネスの手紙は益々ビズネスライクになり、氣分までが事務的になつて了ひます。其の後でかうした通信を書くのは大變氣分がそぐはぬ様ですとてもいゝものは書けません。

二

—學兄

實のところ私は秋になると餘り勉強の出来ない方です。夏のちりくした日に、暑さにすがる様にして書物を読むのが最もよく緊張して讀まれます。論文でも戰闘的のものはどうもさうした時の方がよく書ける様です。秋になると、何か空虚を感ず

る様な、室の何處か、物足らぬ様な具合で、身體の平均が取れないのです。併し讀書欲だけは六月頃から以後といふものは猛然として私を襲うて居ります。獨逸との通商の開けた今日、私の書架にも近頃は多少は獨逸書も殖えました。何を措いても書物を買ひ出した書物が、此の三四箇月の間に可成りの冊數に上り、丸善から見た眼では、私も可成りの資本家らしい様です。後から／＼と讀み破つて行くのも氣持ちのよいものです。其れに近頃は専ら古典を讀んで居ります。アダム・スミスも今までやつて居るよりは、もう少し突き込んでやつて見たいと思つて居ます。マルクスも『資本論』の原本が届いて來た今日、むざぼる様に讀み入ります。今日も朝からチャアティズムを調べて居て、マルクスの思想との聯絡を考へて居たところで、目下のところはまだ／＼彼の若い頃の作品の考察をやらなければなりません。かうした努力を二三年續けたところで屹度何かの發見をして見ませう。唯今はもう其の時の論文に全力が傾注せられて了ふ次第です。

時間が極度に惜しくなりました。私の健康が無限に私の努力を許すならば、何も問題はありませんが、私は目下のところ、かうした讀書に時間を割くと全く同じ割合で私の健康の爲めに多大の時間を割かねばなりません。私の起居動作は全く醫師の命令に隨つて居ります。朝の起床の時間も、食事の分量も、又其の種類も、すつかり日記に書き記して置いて醫師の檢閲を経なければなりません。もう略ぼ一年間此の難行を経過しました。旅行中は止むを得ませんが、家に居る時はすつかり規則づくめで自分の身體を取扱うて居ります。私の先天的に弱性な消化器も、呼吸器も今度こそは大分改造が出来ませう。私は精神の支配力を非常に過度に信じて居ますが、他面には亦科學の眞理にも傾倒します。かうした唯物的の醫師の解釋は、其の限りに於て全く眞理だと信じます。其れで醫師の言ふまゝに自分の一身を任せて居る次第です。食事後の休養もきちんと一定時だけ取り、仕事も少しの過勞の無い様に努めます。此の爲めに大變時間が捨たる様の氣がして惜しくてなりません、今

はごうも止むを得ません。

食事後の規則として長椅子の上にくつたりと寝入り、澄んだ青空を硝子越しに眺めると、つくづく自分の身の幸福を思ひます。二三日前、京都へ小説を書きに来て居られるI君が尋ねて來られました。僕の近傍の様に景色のいゝところには京都にも少ないと言つて居ました。そして私の室が非常に氣に入つたと言はれました。随分貴族的で勿體無い様にも思ひます。併し私は又他面では、此れだけの生活は自分の權利だとも思ひます。恐らく此れは現代の様な矛盾だらけな社會に生活して居るものゝ、免れ難き心的苦悶でせう。現代の經濟社會は、其の立脚點を營利としての交換價值の上に置いて居る。其の前提自身が抑も我々の文化主義の理想から見て間違つて居るのです。我々が眞の價值ある生活をしようとするれば、我々は全然現在の經濟社會から免れ出なければなりません。併し此の絶縁は直ちに我々の死滅を意味します。そこで我々は生きさんが爲めに本來其の前提の間違つた生活を營み、他方

では此れを批判する理想を追求しなければなりません。此れは大變苦しい事です。例へば私は現代の經濟社會の中に生きようが爲めには、私は私の勞働を他人に賣らなければなりません。勞働は本來賣らる可きものではありません。其れを矛盾と感じつゝも、私はやはり間違つた生き方をしなければならぬのです。

三

一 學兄

學兄への手紙も何日かかゝつて書き繼ぐ次第です。昨晚前の處まで書いて夜は十時半になりました。今日は朝から、或る新聞に今後連載するものをすつと書いて來て、夜は此の地の『文學講座』といふのに英國の社會思想の研究を講義して來ました。今夜の月は又別して何といふ美しい光か。私は野中の途を歩いて來て、私の研究室に這入り、美しく照らし込んで居る月光に、電燈の灯をつけるのが惜しい氣がしま

した。電燈をつけて見ると、室の片隅に、今日妻の弟が持つて来てくれた大輪のダリヤが澤山、バケツに入れて置いてあります。其れはもう小さい室を壓迫して居るのです。私は何とも言へない幸福な感情に包まれました。

私は此の自然の中に懐かれた生活をして、本當に幸福だつたと思ひます。多くの光線を浴び、多くの空気を吸ひ、鳥の歌のハアモニイを破らず、山水の風致を害せず、かうした自然の中の生活は何といふつゝましやかな、又心の十分に充たされた平安の生活でせう。近頃市へ出て電車になど乗つても、私は其の塵埃の多いのに頭痛がし出します。又あの機械の雑音に魂が破られる様な感じがします。本當に嫌やな世界です。かう言つたら私の言葉は甚だ貴族的に聞えませう。『そんな贅澤な自然生活の出来るものはよい。此の機械の雑音と此の塵埃の不衛生の中にでなければ生活を許されて居ない労働者は何とする積りか』と反問する人がありませう。其の反問は誠に當然です。私が多少でもかうした生活の營めるといふ事は神に感謝す可く

又さうした労働者に對しては本當に濟まない話です。併し私は、何が理想かといふ價値の判断を、現在の如何なる事情によつても破壊してはなりません。現代の文明は如何にしても機械の雑音を離れる事が出来ないにせよ、其れだから機械の雑音の中に美を見よといふのは甚だ無理です。同様にして煙突の烟の中に美を見よとか、都市街路の不協和音の中に美を見よとか言ふのは無理だと思ひます。此の意味に於て、私は未來派の藝術論に少しづつ不満を持つ様になりました。機械文明は避く可からずと致しましても、機械の雑音が美で無い、人間を死滅に導くものだといふ事を何故言つてはならないのでせうか。又同様に、何人か、此の都會の電車を運轉しなければ、現在の又未來の文明は立ち行かぬから、我々は随つて電車の雑音と塵埃を避ける事が出来ないに致しましても、此の雑音と塵埃とは甚だ不衛生である、人間の生活力を磨り減らすものだとは何故批評してならないのでせうか。私は寧ろかうして、現在の事實に束縛せられない價値判断を爲すこそ必要な事だと思ふのです

何故なれば其れによつて現代の文化を批評し、其の不合理的な點を出来るだけ改進する事が出来るからです。其れ故私は、一面に於て飽くまでも自然に懐かれての生活は幸福であると批評し、他面に於て機械文明は今後不可避的であらうかと考察致し更に最後に、若し其れが不可避的であるとすれば、此の理想と此の事實とを如何に結び付く可きかと考察推究致します。

四

一 學兄

大分議論になつて了ひました。私は實際自分のかうした生活と對社會の問題に就ていろ／＼の事を考へなければなりません。何にせよ我々の社會の成立の前提が、前申した様に理想的で無いのですから、此の社會に生きて理想的の生き方をしようと言ふのは頗る困難な事です。恐らく其れは全く不可能な事でせう。例へば私は無

一文の人間になり乞食の生活を營むとします。乞食する御當人はよいかも知れないが、乞食といふからには、何處かに食物を生産して居る人間がなければなりません。つまりすべての人間が乞食になつたら、乞食といふこと自身が成立致しません。かうした苦悶は至るところに起きて来て、私は持つもならず、捨てるもならずで考へねばなりません。俵に乗るといふ様な事も私にとつては大分問題になります。私は現に身體が悪いのです。出来る事なら俵に乗つた方が身體によいのです。又私は過度に時間が惜しいのですから、俵に乗つて用事を早く足し、其の餘つた時間を勉強に使ふ。其の方が有利です。此う思へば大抵の計費を省いても私が俵に乗るといふ事に大分の意義があるのです。併し一體車夫を雇ふといふ様な事が、人間として神から許されて居るだらうかと思ふと、大分煩悶しなければなりません。此れももつと突つ込んで考へて見たいものです。

まあ、餘り手つ取り早くは問題を片づけられない事に致しませう。私もまだずつと若

いのもつとく突つ込んで見ませう。もう夜が遅くなつて、私の健康に影響しうですから、此れで通信をよします。さうです。今夜は月蝕の晩です。今、月が半分ほど缺けました。

桃 水 和 尙

—

此の通信は又明日へ書き足すかも知れません。ほんの一寸の暇を見つけて書き綴ります。お粗末な手紙になるのはお許し下さい。

今日は満月の日かも知れません。美しい月の光が野の上に満ち溢れて居ります。今ふつと電氣のスイッチをひねつて見ましたら、カアテンの裾だけが友禪の薄染めの様に青く透き通うつて居ります。唯今私は丁度女中が他處へ手傳ひに行き、一人

の子供と私達夫妻だけで暮らして居りますが、此の廣い野原の真中に、二つの魂が一つの灯の周圍に生きて居ると思ふと、まるで物語の様な感じが致します。

— 學兄。此の間は上京致し、不意にお訪ねして失禮致しました。實申すと、松原といふのを杉原と読み誤つて居り、又電車の停留場も其の地名の一つ先方か此方か何れかであつたと記憶して居たものですから、私は下高井戸で降り、杉原といつて聞いて廻つたのでした。お宅の分らないのも無理は無いでせう。併しあの古めかしい甲州街道を歩き出した時には何とも言へぬいゝ感じでした。此の邊は私が東京に居た頃何度か散歩した事のあるあたりです。私は日曜毎によくあの甲州街道をスケッチして歩きました。又動物學の〇教授に伴れられて、あの邊の街道を歩いた記憶もあります。何にせよ其れからもう六七年たつて居ります。美しい雑木林が、どんなにか私の心を和ませたでせう。お宅が分らないでも、此處を歩いたゞけで歸つて其れで澤山ださへ思ひました。あの次の日も午前だけ手すきになつたので、私は

池袋の郊外を少し歩いて見ました。そして昔休んだ事のある家などへよつて、昔を忍ばうと致しましたが、其んな家は家號が同じでも人はすつかり代つて居るので、何とも言へぬ寂しい心持ちになりました。相國寺の近傍も歩いて見たかつたのですが、もう始めに懲りて了ひ、大急ぎで神田の宿舍へ引上げた次第です。

二

私が歸る日、あなたには丁度雑誌の生れた日——しかも全く新らしい生活様式としての雑誌の生れた日であつたのは奇遇でありました。いろ／＼厄介な用事を何度か依頼して居る時、受話機から聞えて来るあなたの聲が、何だか強い決心を含んで居る様にしつとりと感せられたのは事實です。

私は其のお聲を何度か汽車の中でも思ひ浮べました。

汽車では大變美しい雪見を致しました。武藏野も今頃は大變の雪だらうなど、思

ひ浮べて居りました。果實がなつた様な沿線の立ち木を眺めながら、朝の食堂で熱い蜆汁をすゝつたのは、確か彦根近傍にあつた様に思ひます。

—學兄。あなたの雑誌について少し言はせて戴きます。あなたが雑誌の無代配附を實行せられる勇氣に、私は敬嘆させられて居ります。現在の誤謬だらけの社會組織を正して行くに暴力に訴へる革命は正義の手段で無い。生活の何の端からでも正しいと信ずる歩き方を進めさへすれば其れでよいのである。此の正しい人の歩き方が、自ら他に影響し、其れと同じい歩き方をする人が出来れば、此處に二人でも三人でも正しい人達の集團が出来る。古いものはひとりでに新らしいものに代られて了ふ。私は改造の方法に就て斯様に考へて居るものである。そして理想的の經濟組織としては、我々が自由に自己の人格の律するものに随つて、無報酬の勞働を爲す又自己の自由に要求する財を何の代價無く自由に享受するといふ事であると考へて居ります。あなたのおやりになつて居る雑誌經營の精神に共鳴する思想かも知れま

せん。併し私は此の理想を今直ぐ實行し出さうといふ勇氣を持ちません。何故ならば、現在の經濟組織が容易に其れを許してくれないからです。無産労働をやる方は極めて容易い事でありますが、無償享受をする事は今の處我々に許されて居りません。さうなるとやはり我々は在來の通り交換價値に縛られた生き方をしなければならなくなるのです。誠に情け無い事です。あなたは人間の精神を絶対に信用して居られます。無産労働によつて代償的に社會は屹度自分の家族を生かしてくれるものと信じて居られます。私には今の處其の投げ出した信念が出来て來ないのです。此れは一つあなたが尊い生活實驗をおやりになつて世間へ示して下さい。私は目下の處此んな風にして生活して居ます。私は兎に角労働をします。労働と申しても筋肉労働ではありませんが、精神労働を自分の體力の續くだけやつて行きます。そして其れに對する報酬を求めます。其の代りに報酬の一々を労働の一々と對照しません。たゞ全體としての労働に對し、全體としての報酬が釣り合つて行けば其れでよいのです。

いのです。此う考へるだけでも労働といふ事を愉快にやれます。そして多少でも餘裕があれば、其れで足りない周圍の人の埋め合せを致します。さうしたからと言つて、私は少しも其の人に代償を求めません。又私の生活の不足な處を補つてくれる人があれば慎んで其の好意を受けます。此の場合も其れに對して私は少しも代償を拂はうと考へて居ないのです。現在の經濟組織では先づ此の位のところしか私には出來ないのです。

三

其れに私には斯ういふ事が問題になつて來ます。其れは私が何處までも學問を、藝術を、追求したいといふ事です。たゞ食つて生きて行く。其れだけなら私は今直ぐにでも乞食の生活を送るかも知れません。又其れ以外の方法の單純生活を送るかも知れません。併し私には人生とは、單に食つて行くより以上に深いものだと思へ

られます。學問を、藝術を、追求する事が人生の深い意義だと考へられます。ところが此の場合には尙更多くの物質を必要とするのです。早い話が私が相當の學問研究をしようと思ふと、どう切り詰めても毎月八九十圓の本代を要します。さうなると、全體の生活費がかさばつて來て、中々一通りの勞働では自分の生活費を支へ得ないといふ結果になるのです。私には此の問題がある爲めに、桃水和尚の傳を讀んでも其れを讚嘆する心にどうしてもなれません。何故といふに桃水和尚は私の要求する生活様式に全く無頓着であるからです。此の問題を立派に解決してくれた先人は一人も無い。あなたは此の問題をどう御自分の生活の上で解決なさらうと致しますか。伺ひ上げます。

四

もう一つ申し上げたい事があります。其れは雑誌の内容をどうするかといふ事で、

す。私は此れまで幾つかの學校を出て來て居るので、いろ／＼の學校の同窓會雑誌の配附を受けます。學會もいろ／＼のものに加入して居る爲め、此れからも幾つかの雑誌の配附を受けます。此等の會費を計算して見ると一箇月に十圓位になります。其の同窓會の雑誌といふものゝ内容は誠にお話にならぬ貧弱なものです。此れに毎月二三十錢の會費を取られるには弱つて了ひます。此れで有力な學術雑誌が幾つ買へるのにと惜くなる事があります。併し私は一面にかうした學術的の意味の無い、純粹に人間の魂の結び合ふ(例へば同窓とか、同縣とかの)雑誌の意義を、大いに高潮して居るものでありますから、此の雑誌に拂ふ會費を無意義だとはして居りませんが、さればと言つて、毎月其の一つの會に二三十錢の會費を出すのは、私の研究本位の全會計に取つて甚だ辛い事だと申すのです。雑誌一つ買ふにも餘程考へなければなりません。此れは大抵の人がさうだらうと思ふのです。あなたの雑誌が無代配附せられ、讀者は其れに悦んで代價を拂ふものならば、本當に悦んで代價を

拂ふだけの内容を持ちたいものです。たゞお義理で拂ふとか、あなたの遣り方に感心したとか言ふので無しに、雑誌を見て代價を拂はずに居られぬといふ。さうした立派な内容を持ちたいものです。さも無いとやはり又他のものを掠奪するといふ結果になりはしないでせうか。さうした内容はどうすればよいのかといふ事は又大きな問題でせう。

いろ／＼と随分無駄な言葉を申しました。併しあなたは寧ろ其れを悦んで受け入れてくれる事と存じます。私の言葉は随分露骨です。併し此れは私の出来る範圍で私の行爲を處置し、又他を批評しての言葉です。私の破れない殻を御遠慮無くあなたからも破つて下さい。

何度か書き足し書き足し致しました。今日も實は八時間労働どころか、何時間机に向つてペンを動かして居るか分かりません。大分に疲れましたから此れでペンを措きます。

書き始めた時に満月であつた月も、今は全くの暗の夜になつて居ります。過ぐる事の早いものは時許りです。

草花の鉢

一

お葉書並びに雑誌唯今拜見致しました。今日は私の來客日であります。外は大變の暴風雨なものですから、信州から旅行に來られて態々立ち寄つて下さつた人の歸られた後は、誰方もお出でになりません。それで此の手紙を書きます。

諸兄の懐かしいお便り、大變面白く拜見致しました。論文よりも此の方がどれだけ有益であるか知れません。此れは議論では無くて實行です。益々此の欄を立派にする様骨折つて下さい。

新聞を見ると腹の立つ事許りが載つて居ります、現在の議會の墮落を見ると、もうどうに其れを見限つて居るとはいふものゝ、やはり腹が立ちます。此れが議會か議員か、政治家かと、全く以て興奮して了ひます。

國民ももう此處らで見限りをつけるに相違無いのですが、選舉の時になると、又ぞろ其の古顔がのこゝと出て來る事だらうと思ふと、癪に障ります。

地方の實着な、無垢な青年を動かさねばならぬ時になりました。宗教を有する先輩は、宗教を個人の趣味にして置かないで、其の歸結を何處までも追究して貰ひたいものです。

二

二月の終りに一週間許り信州へ参りました。今度も奥さんの御郷里の方へ参りました。本當に信賴して聞いて下さるので、此んなに愉快な土地はありません。

農民美術の方では一生懸命に製作をやつて居る處でした。Y兄にも久し振りでお逢ひしました。

皆んなのやつて居る、あれや此れやの仕事が、次第に聯盟を以て結び付いて來さうな氣がします。此の運動の方が、唯物論的な、又快樂理想本位の所謂社會運動よりも、力強く又眞實のものになり得るといふ自信が湧きます。

此處では直ぐに哲學研究會が成立しました。青年が非常に熱心に研究をつけて居ります。經濟的世界に於ても何等かの新生活が生れそうになつて居ります。文化運動の團體も出來る事になつて居ります。

其等の人達はお祭り騒ぎ的の運動にもう愛想をつかし、だん／＼不純な分子を取り除け、眞に運動を自己一身から起さうとして居るのは心強い事です。

三

現在の成立宗教の世界で、多少でも新らしい運動を起さうと思つて、肩を入れ出した宗教新聞の評論は、少し勢力の無駄使ひの様な氣がしたりして、兎角氣が阻喪します。

私は宗教界はもつと奇麗な清々しいところだと思つて居ました。

ところが實際は、實に陋劣な、陰險な、お互ひが大將になりたがつて秘密運動をやつて居るいやな世界です。私は最初すつかりの人の前に魂の底から敬禮する謙讓な心で筆を執り出しましたが、讀者の中には藝人の藝を見る様な態度で此れに酬ゐるものがあります。此處の藝が悪い彼處の藝が悪いと半疊を入れます。時には直接罵倒した手紙を寄せます。

私は其等の手紙をしつかりと握つたまゝ、振へる手でじつと暫く見詰めます。

併し此れは現在の新らしい運動者が等しく遭遇して居る受難でせう。忍辱でせう私には其の忍辱心が足りないのです。

成立宗教の人達には、言ふに忍びない言行の人がある。腐敗は議會だけでありません。併し現在の宗教學校の學生の中には、餘程眼覺めて來た人もある様です。

今度卒業して田舎の寺へ歸つて行く若い人の中に偶々訪問して來られて、固い決心をお話して行かれるものもあります。夕方の薄暗い室を名殘惜しさうに分れて出て行く此の若者の後姿を見て居ると、始めて會つて又今後永遠に會ふ機會のないかも知れない此の青年に覺えず熱い手を差し伸べたくなくなります。

四

ホルムスの解説に對して、『息もつかず拜見しました』といふお言葉は、大變に嬉しく存じました。

私は當分かうした仕事へ私の全力を注ぎます。現在の社會思想を論ずる人達にホルムスなどはさつぱり注意を惹かなかつたらしい様子です。其んな事には少しも構

はないで、自分のいゝと思ふものだけを紹介致す積もりです。

書齋裡の人は、日常生活の上で何一つ通信す可き材料を持ちません。たゞ毎日同じやうに書物の上に夜が明け日が暮れて行くだけです。

今はポリシエーヴィキのものを多く讀んで居ります。毎日少しがさ／＼し過ぎます。

一鉢貫ひ二鉢貫ひした幾つかの草花の鉢と、獨逸から近頃に来た可成り大きな書集とが、其の私のがさ／＼した生活に僅かに藝術の光を點じてくれます。

大正十一年三月五日印刷

大正十一年三月十日發行

啞の如くに語る

定價貳圓



著者

土田杏村
京都市上京區新町

發行者

内外出版株式會社代表者

大谷仁兵衛
京都市下京區三條通西幸町西入

印刷者

須磨勘兵衛
京都市下京區北小路通西町西入

發行所

京都市西洞院通七條下
京都市京橋區加賀町十

内外出版株式會社

振替穴版三二九五五番

内外出版株式會社印刷部印行

土田杏村氏既刊著作

内外出版株式会社
刊行

文化主義原論

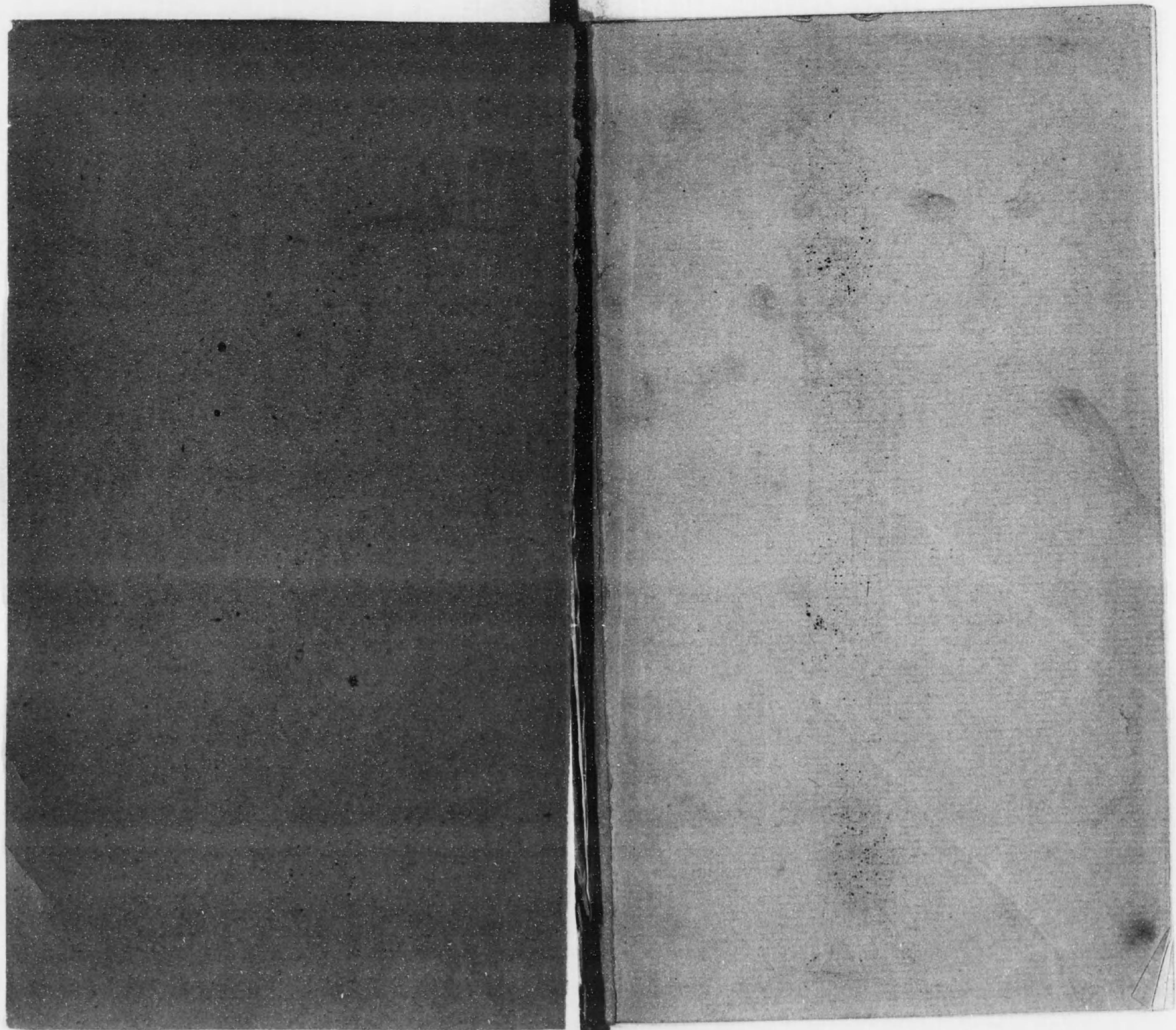
(版三)

文化主義の立場より社會改造の原理を論じたるもの。
廉價普及版定價參圓五拾錢送料拾八錢

雜誌 文 化

(刊月)

文化研究の専門雜誌毎月新らしき文化思潮を解説す。
一冊貳拾五錢 一箇年參圓送料不要



503
80

終